

# 鎌倉時代に於ける南都佛教の展開

——特に良遍の危機意識を中心として——

成 田 貞 寛

一

鎌倉時代に於ける南都佛教復興進展の推移を促す契機となつたものは、教團内部に發生した危機意識に求めることが出来る。しかもこの危機意識を克服するところに、教團のあり方が反省され、従來のものとは異つた色彩の教學が生れ出でたと考えられる。今これを法相宗の學匠良遍を中心とする人々の上<sup>①</sup>に求め、彼等の危機意識が何によつて醸成され、その上に展開された教學が如何なる性格のものであつたかを考察せんとするものである。近時ともすると、この期に於ける南都佛教徒に於ては、危機意識が極めて稀薄であり、従つてこれに對應する教説の自己形式がなされておらぬかの説をなす者があるが、果して彼等は時代への意識が薄く何等の役割をも果し得なかつたであらうか。以下この點について考察せんとするものである。

註① 田村圓澄氏著、日本佛教思想史研究、末法思想の形成の項。

二

鎌倉期に於ける心ある佛教徒をして危機意識の竿頭に立たしめたものは、既に諸先輩によつて指摘されている如

①、平安末以來の社會の激變による不安、僧團の腐敗墮落であり、更にはその僧團を指導すべき教説そのものの不振、缺陷不備についての反省であつたと考えられる。かかる社會的にも思想的にもさしせまつた危機の状態におかれたのがこの時代であり、それは亦一面、おそらく平安中期より澎湃として起つた末法思想に導かれて、今や覆うことのない社會的現實の問題として、その解結が要請せられておつたと言ひ得られるであらう。法然、親鸞、日蓮、榮西道元等が夫々異つた立場に於てきり開いた道もこの要請に答えてのものであつたに違ひない。確かに保元平治の大亂に續く源平の争亂、特に治承四年十二月(一一八〇)、平重衡の南都焼打の業火は、墮落せる南都僧團に反省の機を與えると共に、やがて復興し初められた伽藍と共に形式化せる教學に批判の眼を開かしたと言つてよい。貞慶がかかると時世の渦中にあつて、建久三年(一一九二年)三十八歳興福寺を去つて笠置に隱遁し、つとに直接釋迦に結ばれんことを求めて、釋迦、彌勒、觀音一體としての信仰に歸して、只管に教學の復興に志したことは明らかである。また貞慶、覺遍の遺志を繼いだ良遍においても、早くより世榮を壓い、春日神社の邊りに草庵を結び、白豪寺、知足院別所と移住、四十八歳仁治元年(一説貞永元年八月)生駒山大聖竹林寺に隱遁せし理由も、末法五濁の世に處して、名利のみを追求する僧界に満足せず、眞の求道者としての行き方を求めるにあつたであらうことは疑いなく、これによつて彼が先師貞慶の勤修學記、起請文、海住山寺定狀等の轍を踏んで學徒に警戒し、彌勒、觀音、彌陀一體としての信仰に歸すると共に教學の復興に向つたことは、貞慶と共に最も顯著なることとして指摘さるべきである。さて彼等が釋迦、彌勒、觀音一體、彌勒、觀音、彌陀一體等の信仰に歸したことに就ては既に拙稿に於て述べた如く、何れも法相宗の傳統の上に求められた有縁の諸尊としてのものであり、釋迦信仰の系譜の上に密教的形態を形成する三尊一體としての信仰であつたと考えられる。しかし彼等に於て特に注意を引くのは地藏への信仰に傾倒せることであらう。日本に於ける地藏信仰が特に顯著になつたのは、平安末期に及んで末法到來の聲が高くなつてからのことであるとされ

る。<sup>③</sup>それは地藏に關する經典(特に大乘地藏十輪經)が殆んど皆な末法濁惡時の說法であると言う經說それ自身の說に基づくものであろうが、他面この頃漸く盛んになつた法華信仰と彌陀信仰との結合によつて、現世の得益と後世の安樂往生とを合せ求めた當時の傾向を地藏が象徴し、時代の要求に答へうるものであつたからであつたと考えられる。

このことは貞慶の地藏講式、地藏發願文等によつても明かである。彼が佛前佛後の中間に生れてと云う悲痛の中に、釋迦滅して彌勒出世に至るまでの救主——釋迦が遺法の弟子を附屬せしは地藏であると知つては、いかでかこれを信仰せずにおられようかと云うのが彼等の心情であつたと考えられる。或は亦一面、春日明神の第三宮の本地が地藏であると言ふ因縁に基づくものであつたであらうか。良遍に於ても貞慶より地藏の尊像を傳えうけ、別所知足院に奉安して永世の鎮護となしたことを傳えており、念佛往生決心記には、「無佛世の導師、もと穢土を攝し惡趣を救はんと願う。其の間の利益、専らこれを渴仰すべし、伏て願は晝夜影の如く相傍て我をして彌陀の來迎に遇はしめ給え」と説いて地藏への信仰を幾度か表白している。地藏への信仰が末法五濁世の導師として彼等の危機意識の中に迎へられ、且つまた法華信仰と彌陀信仰との結合の線上に言はば、現當二世に互る救済を願うところに、深く求められて行つたと云うことは、南都佛教徒の一つの行き方を示すものとして考慮さるべきであらう。

南都戒律復興運動の端緒は、既に興福寺西金堂衆の高僧達によつて開かれた。貞慶がかかる傳統の上に立つて承元年間興律の願をおこし、おそらく建暦元年(一一二一年)弟子覺眞と共に興福寺境内に於ける律學道場、常喜院の建立は、その具體化を示すものとして注目すべきである。<sup>⑦</sup>爾來、戒如、覺眞の二大德によつてその志は繼承せられ、戒如門下の俊足、圓晴、有嚴、覺盛、叡尊の四人によつて嘉禎二年(一一三六年)九月、菩薩戒通受自誓進具に至つたことは、寛元三年(一一四五年)九月中旬、家原寺に於ける如法別受の苾芻戒が始行せられることの足場でもあり、佛教史上劃期的なる事柄として諸傳に傳える所である。<sup>⑧</sup>亦かかる機運にあつて東大寺戒壇院受戒の興隆を計り、南都の諸寺

(東大寺、西大寺、大安寺、海龍王寺)に五人の律師を置き戒律を學ばしめんことを發願せし人に松春房尊圓上人のあることを忘れてはならないし、寶治二年十月八日(一二四八年)俊祐の弟子定舜によつて宋よりの律疏諸來運動が實現し、南北京に亙つての律學研究は着々推進せしめられた。<sup>②</sup>かかる情勢下にあつて、良遍が律學研究に志し、律文不明なる時は定舜に問ひ正し、亦戒如の弟子禪慧大徳を竹林寺に請じて行事鈔を談ずる等、その戒律學研究の模様を知ることが出来るが、特に覺盛が興福寺松院に律幢を樹つるに及び、就いて具足戒を受け、共に南都戒律の復興に志し、彼が菩薩戒通別二受鈔一卷を著すや、自らの領解を彼の文言の間に録して潤色を加え、亦覺盛が菩薩戒通受遺疑鈔一卷を著して、自誓通受による比丘戒比丘性共に成ずるの義を立つるに及び、學侶信疑相半ばし、是非の論おこるや、良遍ここに通受軌則有難通會抄一卷を著して、通受することにより遮難俱になき人は體を得るの時、用自然に成ずること明し、古今を援引して證となしたがために覺盛の化大いに振い、内外の大衆俱に歡心を得たことによつてもその役割の程を知ることが出来る。<sup>③</sup>尙戒律に關する著述として、表無表章鈔六卷(或は三卷と云ふ)意業無表鈔一卷、別受行否抄一卷、通受比丘文理抄一卷、三聚淨戒懺悔軌則抄一卷、苾芻略要義六卷等を數えることによつてもその活躍の程を知ることが出来る。以上吾人は彼等が教團の危機に際して、つとに地藏信仰に傾倒しながら律宗復興への道を開き、南都戒獨自の立場に立つてその復興に志したことは、彼等の危機意識を克服せんとする顯著なる運動であつたと言つてよいと思ふ。<sup>④</sup>

註① 唐澤富太郎著、「中世初期佛教教育思想の研究」鎌倉新佛教發生の史的考察の項。

② 拙稿、「鎌倉時代に於ける南都佛教の動向」(日本佛教學會年報第二十三號所收)

③ 和歌森太郎氏「地藏信仰について」(宗教研究第一二四號所收)

④ 大屋徳城氏著「寧樂刊行史」六四頁。

⑤ 蓮阿菩薩傳(日本大藏經戒律宗章疏二、五五四頁)

- ⑥ 淨土宗全書、十五、五六八頁。
- ⑦ 宮崎圓遼氏「鎌倉時代南都の戒律復興」(佛教史學第三號所收)。
- ⑧ 感身學正記、嘉禎二年の條下、並に寛元三年の條下、尙律苑僧寶傳第十一、大悲菩薩傳等。(大日本佛教全書所收)
- ⑨ 東大寺圓照上人行狀上、續々羣書類從、第三、四七九頁。
- ⑩ 感身學正記、寛元元年の條下。
- ⑪ 東大寺圓照上人行狀上、續々羣書類從第三、四七七頁。⑫石田瑞麿氏「覺盛の律宗復興について」(印度學佛教學研究通卷第四號所收)並、蓮阿菩薩傳等の諸傳參照
- ⑬ 南都戒律復興に就ては拙稿「鎌倉時代に於ける南都佛教の動向」(日本佛教學年報第二十三號所收)を參照されたい。

二二

鎌倉時代は平安時代が同化の時代であると言われるに對して、創造の時代であると云われる。印度的中國的制約から脱して、純日本的佛教が創造し始められたからである。①しかし、それは反面からすれば、從來の教えのあり方では既に時代を指導すべき力を持ち得なかつたからであり、亦それ程社會が曲り角にあつて、從來の律令佛教、貴族中心の祈禱佛教、講論佛教では庶民化しつゝあつた社會に於ては、既にその成立の根據を持ち得なかつたからであると考えられる。心ある南都佛教徒がかかる事態を感じとらない筈はなく、既に時代の要求によつて出現した新興新來の諸宗に對して、如何に對處するかは亦、彼等の課題であつたに違ひない。彼等が早くより隱遁の道を選んだ一つの理由はここにあつたと考えられる。②

さて、正像末三時の思想は單なる年代區分ではなく、既に佛教徒の證悟についての問題であり、教のみあつて行證なしとの自覺は必然時機への反省となり、これに相應する教を要求する。③しかしこの問題解決の道は極めて困難にして、徹底せる教學研究の裏付と、宗教的體驗による内面化をまつて始めて可能である。この問題が本格的に論ぜられ

始めたのは末法燈明記であるとされるが法相宗<sup>①</sup>に於ては教學の整理、復興を目ざして、本論に對する研究を如何にすべきかは平安朝末以來の課題であつて、藏俊、貞慶並にその門下に至つて飛躍的成果を治めたと言つてよい。法相教學研究の三部作として、從來成唯識論本文鈔四十五卷(藏俊撰と言われている)、成唯識論尋思鈔十五(貞慶撰)、成唯識論同學鈔六十八卷(良算抄録)を擧げうるが、その成果はそれぞれの使命を帯びて撰述せられた。即ち經論疏の文の決定を果したのが本文鈔であり、更に相傳の正義確立のためにそこに引かれる經論疏の文を如何に解釋するかの役割を果したのが尋思鈔、更に教學の全般に互つて問題となるべき所を網羅し、正義確立を検討するの役割を果したのが同學鈔であると言われる。<sup>②</sup>論義學的に唯識論全體に互つて集録せられ、組織的に編集されている點で單なる註釋書ではなく、個々の論義は獨立し、正義確立への方法に一新機軸を開いたものとして日本唯識思想史上に於て曾て見ざるところである。亦他面に於ては、法相教義の簡單な解説書が出來始め、その組織化を計ると共に一般化への道を開いたことは法相宗の日本化を示すものとして指摘されてよいと考えられる。貞慶による法相宗初心略要二卷、同續編一巻法相心要鈔一巻、勸誘同法記一巻等は何れも他宗への融會を示しつつ法相義に立つての佛教綱要とも言うべき書であり、良遍に於ても觀心覺夢鈔三卷、觀心覺夢鈔補闕法門二卷、法相二卷鈔、眞心要決三卷、應理大乘傳通要錄二卷等何れも短編のものにして、時代教學の特色を取り入れながら著されている點、時機に適したものと言うことが出来る。さてしからは、彼等が法相義の組織化に於て如何なる點に重點をおいてなされたであらうか。

從來、法相教學に於て心の構造を凡ゆる角度から檢討する所以は、萬法唯識の理を明して、迷界の有情をして三界を解脱せしめるのみでなく、更に進んで佛果涅槃を證得せしめんがためである。故に法相教學では心の實性を明かすために、三性三無性論を立て、中道實相を明かし、五重唯識觀を説いてその歸結を性唯識即ち眞如觀にあることを示すと共にこれを以て觀心修入の要諦としている。今彼等が教義の組織化を計るにあたり、唯識觀行に重點をおいてその實

踐性を高調せる所以は、法相教學の歸趨を示したものとて意義あることと考えられる。貞慶は必要鈔に於て、未代時機相應の行法は諸行中、最も易行である彌勒念佛よりほかないことを明かし、「念佛三昧即是唯識觀<sup>⑤</sup>」と説いて、念佛は兜率天の正報と依報を觀じて、ただ阿頼耶識の所變であると觀達する唯心念佛である。彌勒の淨土たる兜率天はこの世界にあり、本來吾が心中にあると知るべし。と説いて唯識三昧觀と念佛三昧とは、所觀の境に寛狹の相違はあるが、別であつて別ではないと説き、念佛の力によつて唯識觀を成ずることが出來ると説くのである。良遍に於ては貞慶が彌勒念佛を以てその要行となしたのに對して、彌陀念佛を以て要行となしている<sup>⑥</sup>。良遍の教學の根本的立場が非有非空なる三性三無性、遍計依他圓成の唯識中道義の立場に立つて、依詮廢詮事理不即不離を主張し、廢詮中道の實踐的立場が五重唯識觀なる第五遺相證性識觀によつて實現される性唯識に歸するものなることは言うまでもない<sup>⑦</sup>。かかる性唯識體解の立場に立つてその實踐修道を念佛門に求めたものと考えられる。即ち小乘の定相の性相に於ては現實のありのままの相用を説くのが中心であるから、非分の事非本相の事、難思無礙の義門を論ぜないが、今は大乘法相の性相であるから難思無礙の義門を性相に入れて論説するのであると言はば攝相歸性體の立場に立つて論ずるのである。彼の晩年の著述である念佛往生決心記には次の如く述べている。

「凡出離方法。當根要行。今度不<sub>レ</sub>空速疾<sub>レ</sub>望。左思<sub>レ</sub>右思<sub>レ</sub>皆難<sub>レ</sub>決定。不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>唯祇至心稱念。唯有<sub>レ</sub>此行<sub>レ</sub>一心得<sub>レ</sub>決定。」と説いて稱念行を以て出離の方法、當根の要行となし、決定の程を示すと共に、その理由として次の四つをあげている。先ず小阿彌陀經の文により、往生の業を説くに更に餘行なく、唯だ念佛の一行のみあり、しかも十方恒沙の諸佛の證誠の語をもつてせられているから、これ以上の證明の甚大なるものはないとして、教文の明かなるを擧げ、二つには、道理甚だ強きが故として、行者の至心稱念の間、阿彌陀佛の大悲願力任運に來到して我が心に冥合し、この時にその心に熏ぜし種子が決定往生の業なり。佛力和合して不思議なるが故に、我が願い弱しと雖も、散心濁ると雖

も、清淨廣大の業を成ずるのである。と説いてその道理の甚だ強き所以を説き、三つには、現證甚だ多きが故にとし、古來の傳記や當今の見聞に於て、具縛の凡夫の念佛往生の現證の多きを説いて、教信、勝如等の往生人を擧げてその例證としている。四つには、成就甚だ易きが故にとして、一切の佛法は何れも出離の要道にして、若しよく修行して發願回向すれば、皆これ往生淨土の正因である。これによつて、本願には發菩提心修諸功德に來迎の願を立て、植諸徳本至心廻向に果遂の誓いを起されている。更に觀經には十六觀行を説いて定散諸善を明されているのである。即ち各々に於て信を引き身に於て功あらば、自ら所樂に隨つてこれを行じ、若し成就を得ば往生することが出来るが、今は時遙かに下り、根機甚だ澆く、身心俱に弱く、障難かたがた繁く、善友を訪うに得難く、祕要を求むるに迷い易い。然れば行ずと雖も、勤むと雖も、成就尤も難く、尤も稀である。これ則ち如説の修行が出来難きが故である。而るに稱念の一行に至りては、必ず成就することが出来る。何となれば粗ぼ教文を窺うに如説に稱念せんことその功甚だ易し。僅かに名號を念ずる如説なるが故に、四儀を簡ばず如説なるが故に、一稱も專念すれば如説なるが故に、聞思所成の三昧を發して現身に佛を見奉り、種々の事を見奉ることが出来る。設いしからずと雖も、一稱も專住するは即ちこれ生得善心相應の三昧である。生得善の行また往生淨土の業であるからであるとその理由を説いている。良遍の淨土教學が懷感の群疑論を本として善導に依らんとせしことは明らかであるが、彼の口稱念佛は本願の第十八願として別出された肝心、至心三昧成就を期するものとして、その高聲多念策勵が強調され、五念起行を助業とし、四修の方法により往生の業成就を期する念佛である。彼が時機相應の教として唯識觀行にその重點をおき、その遣相證性識觀への體達の道を念佛三昧行に求め、持戒諸行と勵みつ、往生の業道成就を平生、臨終を問わず、今生にありとする所謂平生業成を主張し、亦至心念佛者の臨終に於ける業成就を主張する等、彼の教學の特異性を示すものであり、彼の危機意識に對應する教學の自己形成をなし、南都戒の正道に歸つて法相教學の組織化と易行化への道を



開いたものと見ることが出来る。

註① 圭室諦成著、「日本佛教論」四頁参照。

② 護持正法章(日本大藏經、法相宗章疏)巻頭の文によつてもこの頃漸く衰退せる南都僧團の情勢を推知することが出来る。

③ 高山岩男著、佛教の歴史觀(現代佛教講座第三卷所收)。

結城令聞著、中國佛教の形成(講座佛教第四卷所收)参照。

④ 末法燈明記の作者並に撰述期については未解決の問題であるが、齋藤彦松氏「佛滅年紀に據る末法燈明記の撰述期の研究」

(第三回淨土教學大會研究發表)によれば、撰述期の上限は平安前期に入る事を許さないとされている。

⑤ 富貴原章信氏「解説上人の學風と同學抄」(大谷學報第三十一卷、第一號所收)参照。

⑥ 「法相心要鈔」(大正藏經、第七十一卷、五十八頁下段)。

⑦ 「念佛往生決心記」(淨土宗全書十五、五百五十七頁)。

⑧ 觀心覺夢鈔卷中、(大正藏經七十一卷、八十頁上段)。同上卷下、(同上、八十三頁)真心要決後抄本、(大正藏經、七十一卷、

九十五頁以下)

⑨ 觀心覺夢鈔卷下、(大正藏經、七十一卷、八十五頁下段)。

真心要決前抄、(大正藏經、七十一卷、九十四頁、上段)

⑩ 善導大意、(淨全十五卷、五百八十一頁)。

⑪ 念佛往生決心記、(淨全、十五卷、五百五十七頁)参照。

追記 本稿は本年度印度學佛教學大會發表のものを詳論する豫定であつたが意を盡さないまま提出する。何れ再論する豫定である。

(昭和三十三年度文部省科學研究費による總合研究の成果の一部である。)

